

日本統治末期の台湾文学

台湾総督府情報課編『決戦台湾小説集 乾之巻／坤之巻』の刊行

中 島 利 郎

摘 要

在日本統治台湾即将結束的時候，由台湾総督府情報課出版了『決戦台湾小説集』。這是日本統治時期的最后一套小説集。在戰局悪化的戰爭末期，為什麼要台湾出版被一般認為對戰局不起作用的小説集？本稿概述了該小説集出版之前台湾文学界的動向，探索了総督府的出版意図，並通過對從事創作的作家們的作品分析，弄清了該小説集的歷史作用。

關鍵詞：台湾文学，決戦台湾小説集

一、『台湾文芸』の創刊

台湾決戦文学會議が開催された翌年五月一日，台湾文学奉公会より『台湾文芸』が発刊された。先の會議により台湾の文芸界を一元化した——さらに厳密にいうならば『文芸台湾』と『文学台湾』の二誌の解消の下に，日本人作家を中心に一元化された文芸誌である。故に編輯委員の顔ぶれも，台湾文学奉公会常務理事の矢野峰人を筆頭に，小山捨月，竹村猛，長崎浩，西川満と五人が日本人文芸家で，台湾人作家は張文環一人であった。『台湾文芸』の発刊に関して，張文環は次のように述べている。

今まで二つの純文芸雑誌があつたが，この度，二つが一つになり，それぞれの性格のあるものが一つになつて果していい雑誌が出来るか，どうかと私はよく訊かれる。それは大丈夫，御心配に及ばないと，私は答へたのである。といふのはこの度の二つの雑誌が一つになつたことは，単なる合同ではなく，二つとも解消して，再出発したのである。従つて二つが一つになつたのではなく，二つの雑誌が今まで希望してゐたことが達せられた理である。～／～編輯委員としての私の気持も，今までよく見受けられるような，単なる思ひ付で書いた作品は取りたくないと思ふ。建設的な構想と苦心のもとに産れた作品でなくては誠心が見出せない^(注一)。

この一文から，世間一般の認識では，『台湾文芸』は性格の異なる二つの純文芸雑誌が一つになつて発刊されたこと，そして，性格の異なった集団によって果たしてより良き雑誌ができるのかという疑問があつたことがわかる。これに対して張文環は，『台湾文芸』は二つの雑誌が一緒になつたのではなく，「二つとも解消して，再出発した」と答えている。つまり，まったく別の雑誌だと言うのだ。勿論「二つの雑誌が今まで希望してゐたことが達せられた理である」という言の裏には，『台湾文学』をいわば強制的に廃刊にされた者として，その胸中にいかばかりの憤懣があつたかは計り知れず，額面通りには受け取ることはできまい。

では，『台湾文芸』は，張文環の言うような「再出発」した文芸誌であつたかということ，それは

張文環の想いとはかなりかけ離れていたと言わねばなるまい。『文芸台湾』及び『台湾文学』は、西川満と張文環という文学的個性、支配者日本人作家と被支配者台湾人作家の対立を背景に、それぞれの読者を獲得しつつ運営されていた。そして、それは共に一般文芸誌であるとともに同人雑誌的な性格をもって経営され、公的性質をもつものではなかった。それに対して『台湾文芸』は、台湾文学奉公会という総督府主導の皇民奉公会中央本部に繋がる公的組織の運営する雑誌として出発したのだから、当然個人主導の文学的個性が色濃く反映されないはずであった。だが、実情は些か違っていた。それは先ず編輯者の顔ぶれを見てもわかる。編輯者筆頭の矢野峰人は台湾文学奉公会常務理事、つまり『台湾文芸』発行の責任者であり、且つ西川満の台湾における文学方面での師で、その文学をよき理解者であったし、また『文芸台湾』の寄稿者で、有力な支援者でもあった。長崎浩もまた西川満とは親しい関係にあった『文芸台湾』の寄稿者で、当時は総督府の情報課に所属し、『台湾文芸』では創刊時より停刊まで編輯発行人として奥付に名が掲げられていた、いわば『文芸台湾』のお目付役であった。それに西川満が加わる。いずれも『文芸台湾』派である。一方、文芸評論家の竹村猛は『台湾文学』派ではあったが、小山捨月と同様に台湾の文芸界ではそれほどの力をもっていなかった。故に、編輯者の力関係は図式的に言えば張文環が一人孤立していたといつてよい。つまり『台湾文芸』は、『文芸台湾』派の同人誌的性格を一応捨象したその延長上にあった文芸誌だと規定してもよいだろう。それが如実に現れているのは『文芸台湾』に連載され、その終刊とともに未完に終わるはずであった濱田隼雄の「草創」及び西川満の「台湾縦貫鉄道」という二大連載小説が共に——前者は連載第七回から、後者は第六回から——『台湾文芸』創刊号から登載されていることである。張文環の言うように、二つの雑誌が一緒になったのではなく、「二つとも解消して、再出発した」上で、台湾文学奉公会という公的機関が発行するならば、当然このようなことは起こり得ず、この両作品ともに別の方法で発表されなければおかしいのである。故に、これにより『台湾文芸』という雑誌の性格が解るし、またこの雑誌を機関誌とする台湾文学奉公会の志向も推し量ることができよう。そしてこれ以後、台湾の文芸界はすべて台湾文学奉公会の指導のもとに動くのである。

二、台湾文学界の総蹶起

『台湾文芸』が創刊されて間もない頃、日本文学報国会は第二回国内文学者大会を六月一八日に「決戦体制に即応して国内戦線各戦闘部署に挺身せんとする本会会員の新东方途を樹立しその総蹶起を促して決意を中外に表明大いに戦意を昂揚」するために「決戦体制即応文学者総蹶起大会」と称して開催することに決定した^(註1)。この決定を受けて、台湾文学奉公会は先の台湾決戦文学会議参加者に常務理事矢野峰人の署名のもと「台湾文学界の総蹶起」を呼びかけた。

全島要塞化の叫びにつづいて島民六百六十万蹶起の諸声が挙がる。それ程迄に敵の不逞なる挑戦ぶりは露骨となり、本島侵寇の気配は濃厚になつて来たのだ。～／四圍の情勢既に斯くの如し、豈ひとり文学者のみ何時迄も晏如たり得ようか。われら曩に決戦文学会議を開き、聖戦完遂の大業に協力すべき文学者の覚悟を示し文学報国の誓ひを固くしたのであつたが今や一日も速に攻防完備の態勢を整ふる事を必要とする事態に直面するに至つたので、われらは、茲にその決意を新にするのみならず、即刻これが実践に極力努めざるを得なくなつた。／茲に於て乎、本誌は、遽に会員に檄を飛ばし、各自が今次の全島総蹶起の運動に、如何なる覚悟と方策

とを以て参加せんとして居るかを問ふ事により、以て全島民の赤誠披瀝に呼応する所あらんとした^(注三)。

日本文学報国会の「総蹶起」大会とは、日本政府が昭和一九年三月に施行した決戦非常措置要綱に対応する国民運動として、日本政府、翼賛政治会、大政翼賛会が合同で発表した「国民総蹶起運動」からの命名で、この運動の目標は「戦意昂揚」「生産増強」「食料確保」「国土防衛」の四点にあり、五月一四日の日比谷公会堂の中央総会から展開された^(注四)。台湾においても、その影響下に「皆働並勤労倍化」「決戦生活強化」「国民貯蓄早期突破」「台湾要塞化」が目標とされ、それに基づき以上のような「台湾文学界の総蹶起」が呼びかけられたのであった。

『台湾文芸』第一巻第二号(昭和一九年六月一四日)は、この呼びかけに応じた文芸家達の「覚悟と方策」を掲載している。日本人では今田喜翁、濱田隼雄、新垣宏一、西川満、渡辺よしたか(義孝)、川見駒太郎、河野慶彦、神川清、吉村敏、竹内実次、長崎浩、中島源治、村田義清、大河原光広、山本孕江、小林土志朗、小山捨月、斎藤勇、台湾人では呂赫若、張文環、楊遠、高山凡石(陳火泉)、呉新栄の二三名の「覚悟と方策」である。

だが、文芸家達にとって、この台湾における「総蹶起」の四大項目をいかに自らの文芸創作に結びつけるかには戸惑いがあったようで、その「覚悟と方策」は総じて文芸家達の戦争協力への姿勢が概念的抽象的に、あるいはスローガンとして語られるのみで、いかにその創作に反映させるかという具体的な回答は少なかった。たとえば、濱田隼雄は「文学的蹶起を」と題して、次のように語っている。

～大切なのは、文学者が島民の明るい行先を予見する責務を有することを自負して、～精神の攻勢を駆りたてるやうな仕事を、文学の上で敢然と実践することではないか。／文学雑誌が一つになつたからとて作品行動が消極的になるやうでは要塞を弱体化する罪を犯してゐると云はれても仕方がない。／島民の手で堅固な要塞を作れば、米英なんぞ手も足も出せるものか、と云つた気魄を、小説や詩や戯曲の中に、たゞその中に盛り上げるのこそ、文学者の総蹶起である。

確かに「精神の攻勢を駆りたてるやうな仕事を、文学の上で敢然と実践すること」、あるいは「島民の手で堅固な要塞を作れば、米英なんぞ手も足も出せるものか、と云つた気魄を、小説や詩や戯曲の中に、たゞその中に盛り上げる」とは述べるものの、では一体誰のために何を描くのかという具体的な方向性をこの一文からは見出せない。

では、台湾人作家はどうだったのか。呂赫若の「一協和音にでも」という一文を引いて見る。

～文学者の蹶起とは、単に象牙の塔から出てくるといふことではなしに、この拳島決死の大航海に直面して文学の独自性を見失ふことなく、否むしろもつと明確に今日に於ける文学の機能と実体とを把握することである。かうした深い省察なしに、畢竟文学も、この拳島決死の大航海に寄与し得ないばかりでなく、文学者自身の蹶起が無意味に終はるのを恐れるからである。～／今や文学者も蹶起した。それ故に文学者は実のある文学奉公をせねばならぬ。～

呂赫若のこの文章はかなり隠喩的にとらえることができる。「もつと明確に今日に於ける文学の機能と実体とを把握」せよとは、一見すれば、「拳島決死」の台湾の要塞化に寄与する言のように

も読みとれるが、これはその前の「文学の独自性を見失ふことなく」というフレーズを強調しているのだから、実際には作家達に（それは台湾人作家達に限定されていたのかもしれないが）本来の文学性を忘れるなということ述べていると考えてもよい。先の決戦文学会議を通して、台湾の作家達は台湾文学奉公会に一元化され、文学が本来的にもつ自由と多義性がほとんど失われ、作家達の創作に対する知性や感性は「決戦態勢の確立」と「戦争協力」というスローガンの下に凍結されつつあり、運命的なものとして戦争を受け入れざるを得ないという状況であった。故に、呂赫若は隱喩的抽象的に「文学の独自性」を強調することはできたが、「総蹶起」に対する「実のある文学奉公」の実体をあからさまに述べるわけにはいかなかったことはやむを得ないであろう。

作家達の「台湾文学界の総蹶起」に対する回答は、以上の二作家に象徴される相違を内包してはいたが、共に「総蹶起」への決意は語ることもできても、その具体的な方向性を示し得なかったことは、他の作家も概ね同様であった。

その中で、特異な一文を寄せた作家がいた。「詩も作れ、田も作れ」という一文を寄せた西川満である。

私の大伯父も、父も、台湾石炭界の草わけであつたから、私は三つの歳以来、黒びかりのするあの石炭と共に生活を始終してきた。／石炭は、長いあひだ、やさしい父をとほして、私に文学することを許してくれた。その父を、去冬、私は失つた。父の追善のために、いのちをこめて、私は一卷の書をかきあげた。／いま私は、父の志をついで、病弱の身ではあるが、石炭と四つに組んでゐる。父祖三代のゆかりをもつて、石炭はこころよく、未熟な私を迎へてゐるやうだ。／思へば、「詩も作れ、田も作れ」といふのは、幼いときからの、父の教訓であつたが、この家訓にしたがつて、石炭を採掘してゆくことは、私にとつて、大きなよろこびである。

西川満は、昭和一八年一二月二〇日、父親・西川純を亡くし、その翌年、ちょうど『文芸台湾』を終刊にした一月に、父の経営していた樹林の昭和炭鉱社長に就任した（但し、正式には昭和二〇年一月。また、上記引用中の「一卷の書」とは、昭和一九年一二月に出版される日蓮の伝記『日本の柱』を指す）。「石炭と四つに組んでゐる」とは、そのことを指している。この西川の一文は、他の作家達の「総蹶起」に対する文章とは、まったく対照的であった。石炭が西川一家の生活を支えてきたこと、その中心であった父の死によって、白らがその後を継いだ、文芸に従事すると共に産業に従事することが家訓であったこと等、淡々と自らの現況が語られているのみで、他の作家のような強い調子の「総蹶起」へのスローガンの決意は見られない。勿論、石炭は当然戦時戦略物資として当時のあらゆる産業に必要なきわめて貴重な物資であったので、その生産に正面から取り組むことになったことを、西川満が「総蹶起」への意志として表現したとも考えられるが、その特異性に些か合点がいかなかった。ところが、この一文の載った『台湾文芸』第一巻第二号の編輯後記の中に以下のような件りがあり、この一文と照らして判断すれば、その疑問も自分なりにではあるが氷解した。

～わが文学奉公会は、此度総督府情報課の斡旋により島内各地の職業戦士と暫らく起居を共にし、その貴重なる体験を作品に盛らしむるため、十三名の文学者を急遽各方面に派遣する事となつた。今回は諸種の打合その他の事情により、台北附近在住者のみを動員する事となつたが、順次各地方会員の出馬を促す筈である。～

この編輯後記は、その署名により矢野峰人が書いたことが解る。つまり、この「総蹶起」と前後した時期に台湾文学奉公会に総督府情報課より急遽上記の依頼があったのである。五月一日発行の『台湾文芸』創刊号には、まったくそれに関する記述はないから、時期的には、おそらく文学奉公会が各文芸家に「総蹶起」への「覚悟と方策」執筆を依頼した直後であったろうと推測される。故に、西川満の「総蹶起」へ寄せた一文は、「総蹶起」への決意を示すためというよりは、その先に急遽決められた「職業戦士」を描き、彼らを鼓舞激励するための小説の執筆——それは後に『決戦台湾小説集』としてまとめられる——を前提にしての寄稿であったと考えられるのである。先に述べたように、矢野峰人は西川満とは最も親しい間柄であったし、長崎浩もその盟友であった。情報課に所属していた長崎が文学奉公会の責任者であった矢野に情報課の依頼を進言し、それを受諾した矢野は具体的な人選や派遣地を当然西川と相談したであろう。勿論他の三人の『台湾文芸』編輯者も相談には与ったのかもしれないが、西川満がかなり主導的な役割を演じたことは、後に刊行された『決戦台湾小説集』からさまざまに推測できるからである。その推測は次項以下に譲るとして、この「総蹶起」の一文は、西川満自らが既に重要な戦時物資である石炭増産に取り組んでいることを強調しており、そして、そこには既に『決戦台湾小説集』刊行への方向性が内包されていたと考えられるのである。

三、瀧田貞治の「増産と文学」

以上のように、「文学界の総蹶起」を通して、台湾の作家達は戦争協力へと否応なく取り込まれていくのではあるが、これ以前に既に「戦力増強と増産」、そして「増産と文学」との関係を見先的に論じた人物がいる。台北帝国大学助教授で西鶴研究家、先の決戦文学会議にも参加した瀧田貞治である^(註16)。昭和一九年三月一日発行の『台湾公論』に掲載された「増産と文学」は、「台湾文学界の再検討が叫ばれ戦力増強と文学が如何なる影響と関聯性があるか」(小石原勇「編輯後記」)について、次のように述べている。

戦力増強が、一にかゝつて増産にあり、増産のみが大戦の趨帰を決するのである以上、国のすべてをあげて増産の一途に立向かはせねばならないのは、最早や議論の余地はない。ゆゑに、総力戦に於ける有力な一役を買つて雄々しく起つてゐる文学も、その重点がこゝに置かるべきは一応当然であり、従つて戦力増強とか、はりのない文学が存在権を喪失するといふのも論理的に最もな話しである。そこで問題は、果して文学は、増産と同義語である戦力増強に寄与し得るものであらうか、寄与し得るとすれば如何なる結びつきに依つてその任務が果せるのか、といふことに先づ検索の眼が向けられなければならない。(傍点、筆者)

ここで、瀧田は先ず「増産のみが大戦の趨帰を決する」ことを前提に、現在の台湾文学も「戦力増強」、つまり「増産」との関わりで存在しなければならないことを述べる。しかし、この文を仔細に読めば、瀧田は「増産と文学」の関係を全面的に認めているわけではなく、現況のような戦時期においては「一応当然であり」「論理的に最もな話しである」と述べているにすぎないのである。「一応」という留保や「論理的に」と言う語は、この文章の中では単なる修飾語として見逃してしまいそうであるが、それがこの文章の中で台湾の作家達に向けた瀧田の大きな意図でもあったのである。ここでは、瀧田が「その重点がこゝに置かるべきは当然であり」「文学が存在権

を喪失するといふのも最もな話しである」と、単純に断言しなかったことを銘記しておく必要がある。続いて瀧田は「増産」に関わる文学の方法として、以下のように二つの方法を掲げる。

～而して増産に関する限り、文学の特性より考へて、結局文学が一度産業戦士を通し、産業戦士によつて具体化された力が増産を結果させる、といふことが先づ誰にも考へつく増産と文学との結び付き方であり、次ぎには、増産が唯一の戦捷方策であることを、総力戦士たる国民に徹底せしめ、挙国一体増産の気構へも持たせるといふ、この二つの方法以外に特別な働きかけの途はないのではないだらうか。

「増産」に関わる文学の方法として第一は、「文学が一度産業戦士を通し、産業戦士によつて具体化された力が増産を結果させる」こと、具体的に言うならば、産業戦士が小説等の文学作品を読んで、それに力づけられることことが、増産につながるということである。そして、それならば、次に産業戦士が、一体どのような文学を要求しているのかを知らねばならないことになる。そこで瀧田は、産業戦士に贈るのに増産をテーマにした文学という発想は当然であろうが、たとえば前線の勇士が必ずしも戦記物や時局物を好むわけではなく、それは彼らの日常体験が既に十二分に戦記的であり時局的であつて、今日の慰安や明日への心の糧を求めようとする彼らに戦記物や時局物を贈ることは考慮が必要なと同様に、産業戦士に対してもかような配慮が必要ではないか、との意見を述べ、更に以下のように言う。

～所謂増産文学なるものが、机上プランの如き企画によつて成就しうるとなすは、その實際を知らざる者の言であり、所詮皮相単純の譏りは免れないであらう。／かく考へ来れば、問題は寧ろ作家自身のうちにある識見と態度に帰するのであつて、作家が真に時局を認識し、国家的使命に徹し、私を滅して職域に忠実であればそのものから出づる作品は、例へば時局を正面の題材としなくとも、そこにはおのづから作家の持つそれら本質的のものが滲み出てゐる筈であり、苟も国家的方向に逆行する如き作品の出現の余地は断じてないのである。

時局柄、この瀧田の一節にもかなりの韜晦があり、かつ文飾がある。今、それらを考慮して上文の他の箇所からの引用も加えて解釈するならば、以下のようになると思う。

「増産文学」は時局柄「一応は当然」ではあるが、多くの作家がその現実、現場の経験なくして「増産文学」を書いたとすれば、それにどのような効果があるのか。ただでさえ過激な現実を更に「増産小説」で追体験させるのには配慮が必要なのに、作家達の机上の空論の上に成り立った「増産小説」は、産業戦士には「全くお門違ひであり」彼らを「冒瀆することにさへなる」のである。それに反して、産業戦士が「一夕寄席にたはいない落語をき、腹の底から笑はせられ、そして一日たつぷりの労働が齎らした疲労はこの哄笑により消し飛ばされ、明日よりは更に烈しい勤労に喜んで出で立つ、といふ事実も、産業戦士を対象とした文芸の在り方に示唆を与へずには置かない(傍点、原文)」。勿論、作家が落語家のような方法で産業戦士に慰安を与えることはできない。故に「問題は寧ろ作家自身のうちにある識見と態度」にあるのであつて、そのような「識見と態度」をもって描いた小説ならば「時局を正面の題材としなくとも」、それぞれの作家の個性が現れる筈であり、「国家的方向に逆行」することが断じてない、つまり産業戦士の今日の慰安や明日への心の糧となるのだ、と言うのだ。文学創作とは、作家をとりまく環境やその作家の

感受性により産まれる個性が生命であり、それが読者に感動を与える。また、読者の側も作者の意図とは別に、それぞれの個性によってその創作を多義的にとらえる。それをはずれては、創作の意味も、読書の意味もない。瀧田は一見時局に迎合するかのよう筆致で、そのように主張している。

「増産」に関わる文学の方法として第二は、「増産が唯一の戦捷方策であることを、総力戦士たる国民に徹底せしめ、挙国一体増産の気構へも持たせる」ことで、「直接増産に干渉しない国民一般にむかつて示さるべき増産文学といふものも当然考へられなければならない」と言う。しかし、この言葉に続けて、次のようにも述べている。

第一、さういふ小説（増産文学を指す。筆者）のみが社会に現はれて来れば、人間はその通りに動きそれで増産が結果されるかといふと、しかく簡単ではない。勿論その増産文学が、文学としての高さを持つてみるかといふところに帰着するのではあるが、人間の生命力の補給が思はぬ手近かなところにあつたり、取るに足らぬと思はれたものが活動の重要な力となつたりする社会がよくあるのである。文学はそこを深く察知し見抜いてかゝらなければならないのである。文学がスローガンのみでは駄目であり、筋書だけでは藁のやうに噛めないものになるといふのは実にこゝなのである。たゞ増産々々と徒らに呼び声のみ高く、その実が備はらないと、作られた文学が、その動機の善なるにもかゝらず、産業戦士にも銃後にも見放されることになり～

瀧田は「増産文学」に頭から反対したわけではない。その作品が「文学としての高さを持つて」いるならば、「増産文学」も決して価値のないものではない。しかし、すべての作家が自らの環境や経験の外にある「増産文学」を創作しても「文学としての高さを持つて」提示できる訳もなく、それが単なるスローガンのみで終わることは、結局は文学の、そして作家の自殺行為に等しいと論じているのである。それならば、作家自らが己の本分を守って、その個性に基づいた作品を発表したほうが、それが「増産文学」という範疇からみれば取るに足りないものかもしれないが、「産業戦士」及び「総力戦士たる国民」にとっては今日の慰安、そして明日の心の糧となり、意外な効果を生み出すと言うのである。ここにおいてこの項の最初で言及した「一応」という留保や「論理的に」と言う語の意味が明確になるであろう。そして、瀧田は最後に次のように結論する。

文学は観念的に頭で考へたやうな一筋縄のものでは決してないのである。廻りくどい道筋を辿つて、結果に於て増産となつてみるといふ場合の寧ろ多いことを絶対に忘れてはいけな^いし、この^功用は軽視出来ないのである。

以上が、瀧田貞治の「増産と文学」の内容である。瀧田がこの一文を発表したのは、『決戦台湾小説集』出版に直接結びつく作家派遣が決定する三ヶ月も以前のことであった。台湾決戦文学会議に参加した彼は、その会議の結果から派生する台湾文学奉公会を主軸とした台湾の文芸界の動向に危惧を抱いた。世情が、国を挙げての増産のみが戦争に勝利する唯一の道だと確信するならば、自ら選択するかあるいは他から与えられるかは別としても、台湾文学奉公会も当然「増産」というテーマに帰結する。そして、今まで、見下げられ顧みられなかった労働者達が「産業戦士」

の美名の下にクローズアップされる。作家達の多くは今まで意識の外にあったその「産業戦士」を否応なく描くことになる。瀧田はそうした文学のあり方、作家達の身の処し方が、「産業戦士」や国民に利益を与えないばかりか、文学及び作家の自殺行為になると批判している。それは先に述べた呂赫若の「文学の独自性を見失ふことなく」という言葉にも合致する。瀧田の先見性は、「増産と文学」の結びつきにいち早く明確に言及したばかりではなく、それが文学及び作家の自殺行為にもなると警告した点にあると思う。それは、瀧田が創作を旨とする作家ではなく、長年研究者として客観的に作家や文学界を見据えてきた者ゆえに持ち得た批判精神の結果であるといえるだろう。こうした瀧田の考えに真っ向から反対した作家もいた。たとえば、濱田隼雄は昭和一八年七月一日『文芸台湾』第六卷第三号の「文芸時評」の中で、次のように述べている。

日本的な文学つて何だ、戦争に協力する文学つて何だ、と云ふ声をちよいちよい聞く。さう云ふ声の裏には、この戦時下にも一本のグリヤを美しく書くことが芸術である、とのつぶやきが聞え、兵隊だつて風流を忘れぬではないか、との我田引水がひそかに行はれてゐる。／＼で、労務奉公隊を書くばかりが文学ではないとか、「万葉集」よりは「金色夜叉」の方が役に立つ、とか云ふ甚だのんきな世迷ひ言ならぬ世迷はせ言が出てくる。その当人が公的な場面では堂々と皇民奉公を説いてゐるのだからをかしいもんだ。

濱田のこのような批判は、直接瀧田のみに向けられたものではないしろ、瀧田の増産文学観批判をもその中に包含していることは間違いない。しかし、結局は瀧田等との間で論争を生むことなかったことは、時勢のしからしむるところであったのだろう。ただ、ここで注意することは、瀧田は「増産と文学」の関係を以上のように論じはしたものの、濱田が述べるように皇民奉公や日本の南進に反対したわけではないということである。それは、たとえば「人と言葉と書物の南進」(昭和一七年四月一八日『台湾地方行政』八一四)等を見ればわかる。故に、瀧田の増産文学観も、基本的には日本の国策を認めたいうでの指摘であることに留意する必要がある。尚、昭和一七年『台湾公論』一一月号にも同様の考えを「時局文芸のあり方」と題して発表している。

そして、はからずも総督府情報課と台湾文学奉公会は、「増産と文学」を結びつけ、瀧田の述べた「産業戦士」と「国民」に対する二つの方法をとったのである。そこには、瀧田の文学的「真意」が反映されることはなかった。既に情報課も奉公会も時局に迫られ、そこに思いが至る余裕もなかったのであろう。

最後に、瀧田の以上の論にも視点の欠落があることを指摘しておきたい。瀧田自身にはあまりにも当然のこととして論じなかったのか、あるいは時局を考慮して忌避しなければならなかったのかはわからないが、それは、台湾において「産業戦士」とは、誰を指すのか、また「総力戦士たる国民」とは、誰なのか、という事、つまり「増産文学」を誰に読ませるのか、あるいは誰が読んだのか、という視点である。この点については『決戦台湾小説集』の内容を見ながら、次項以降で考察したい。

四、生産現場への作家派遣と『決戦台湾小説集』の刊行

台湾決戦文学会議の翌年、先に論じた「台湾文学界の総蹶起」に呼応するかのようには総督府情報課は「要塞台湾の戦ふ姿を如実に描写し、島民の啓発に資すると共に、明朗にして潤ひある情

操を養ひ、明日への活力を振起し、併せて産業戦士に対する鼓舞激励の糧」(『決戦台湾小説集』「序」)とするために、「文学奉公会に協力を求め」、「文学奉公会は情報課と協議の上会員中十三名を選び、この要請に応じ各一週間の日程を以て」各生産現場に派遣することにした。そして、「単なる表面的見聞に終わることなく、真に現場で挺身する人々の息吹に触れ、その労苦を味ふため一週間内外現地に滞在し起居飲食を共にして、その間の見聞体験を素材として小説を書く」(以上『台湾文芸』第一巻第四号「派遣作家について」)ことを作家に求めたのであった。つまり、文学奉公会と情報課は、ここにおいて台湾決戦文学会議の議題だった「文学者の戦争協力——その理念と実践方法」を具現化したわけである。情報課の言う「島民の啓発に資する」及び「産業戦士に対する鼓舞激励の糧」とは、とりもなおさず前項で見た瀧田貞治の二つの方法である。「明朗にして潤ひある情操を養ひ、明日への活力を振起し」とは、情報課の各作家の作品に対する希望ではあろうが、果たして派遣作家が一律に「産業戦士」を描くことで、それが達成されたか否かは、瀧田の言に重ね合わせてみれば甚だ疑問である。

一三人の作家とその派遣地は以下の通りである。

呂赫若 | 台中州下謝慶農場

濱田隼雄 | 日本アルミニウム工場

新垣宏一 | 台湾船渠工場

西川満 | 鉄道部各機関／石底炭鉱／台湾船渠／斗六国民道場

張文環 | 太平山

龍瑛宗 | 高雄海兵団

吉村敏 | 公用地

楊雲萍 | 台湾繊維工場及鉄道

楊達 | 石底炭鉱

高山凡石 | 金爪石鉱山

長崎浩 | 太平山及公用地

河野慶彦 | 油田地帯

周金波 | 台南州下斗六国民道場

派遣作家は、当然すべてが先の会議の出席者である。注目すべきことは、派遣作家が台湾人作家が七名と過半を占め日本人作家の六名をうわまわっていることである。当時、日本人作家のあるものは徴兵によって戦線に送られており——たとえば中山侑や川合三良等——、当然派遣作家として選ばれるべき作家が不在であったことが台湾人作家の過半を占めた原因かもしれないが、しかし、この派遣が行われていた頃出版されていた小説集、——たとえば『決戦台湾小説集』を刊行する台湾出版文化株式会社刊行の小説集をみれば、そこに収められているのはほとんどが日本人作家の作品なのである^(註六)。故に、ここに文学奉公会及び情報課の意図が明確に読みとれる。つまり、情報課の立案したこの企画には、多くの著名台湾人作家の参加が是非とも不可欠であった。なぜならば、情報課の企画は、誰に対して必要だったのかと言えば、それは「産業戦士」であり「総力戦士たる国民」に対してであり、台湾において「産業戦士」、「総力戦士たる国民」とは、その人口の九割を占める台湾人がその中心なのである。領台五〇年に近い日本統治の中で、日本語教育は台湾の社会に浸透し、知識人は勿論のこと、一般の台湾人も一九四〇年代にはその

過半は日本語に通じるようになった。それによって日本語を介しての文学の読者も多くなり、所謂「〈大東亜戦争〉期の台湾における読書市場の成熟」期を迎えた^(註七)。ただし、読書市場が成熟したといっても、文学書の読書人口は六百万台湾人の多くてもおそらく六千人ほどで、人口の一割前後ではなかったかと思われる。一九四一年の台湾人日本語理解者数は、五六八万人中約三二四万人で、五七割の比率だったという統計があるが^(註八)、その多くは公学校(後に国民学校に統合)や国語講習会等で日本語を学んだ者で、日本語で書かれた小説を「味読」する程の者は、中学以上の教育を受けるか、あるいは日本留学の経験がある知識階級の一部の人々であろう。とすれば、「島民の啓発に資」し「産業戦士に対する鼓舞激励の糧」とはいつても、実際には極めて限定された台湾人島民や産業戦士がその対象になるのであって、派遣現場における大多数の「国語不理解者」を含む台湾人「産業戦士」への「鼓舞激励の糧」にはならなかったと思われる。前項で瀧田が指摘したように、この大多数の「産業戦士」への効果的な「鼓舞激励の糧」は、実際には「たはいない落語をき、腹の底から笑はせられ」という類の慰安であったと言ってよいであろう。この点について、派遣作家として現地に赴いた楊達は、収録作「増産の蔭に」中で、また楊雲萍は、「派遣作家の感想」中で、娯楽としての芝居こそが「産業戦士」への効果的な「鼓舞激励の糧」となると、瀧田と同様の意見を以下のように述べている。

黙々と地底で働き通してゐるこの人達にとつて、芝居と言ふものが如何に大事な清涼剤であり、勤労への刺激剤であるかは、来た早々の私にも容易に想像できた。～まとまつた芝居でなくて、たとへ一寸した、かくし芸をやつただけでも、それが如何に採炭夫達を喜ばし、その勤労意欲を刺激するであらうかと言ふことは想像にあまりある。(「増産の蔭で」)

また、或る鉱山の労務の責任者は、よき脚本の少いことを嘆き、よき脚本のよき芝居が如何に勤労する人たちを慰め鼓舞するかを語られた。また、或る農場の篤実勤勉な主人は、働く農夫たちを他所に移動させないために、自ら「三国志演義」や「水滸伝」を物語つて聞かしたさうである。(「派遣作家の感想」)

『決戦台湾小説集』は、乾・坤共に初版一万部であり、当時の台湾の出版界及び当時の状況からみれば、小説集としては破格の部数である。しかし、それは結局は文学愛好者を含む極めて限定された台湾人知識階級である「島民」や「産業戦士」のために刊行されたと思われ^(註九)。

しかし、そのように台湾人知識階級を対象にすればこそ、著名台湾人作家の作品が必要であったのだ。日本人作家が「産業戦士」であり「総力戦士たる国民」である台湾人の生活や感情ををいかに理解していたのだろうか。たとえば、台湾人の言語を取り上げてみれば、それは推測できよう。台湾人の生活言語である閩南語や客家語は、特別な訓練を受けた警察関係者や一部の教育関係者には理解できたであろうが、一般の殆どの日本人にとっては、常に耳にする言語であっても理解は不可能であった。もし、他者が真にその土地に生活するものを理解し、動かそうとすれば、その土地の言語を深く知らなければならぬはずである。しかし、台湾在住の日本人作家にはそのような人物は私見の限りいなかったはずである。故に、台湾における日本人作家には台湾人の生活感情にまで立ち入った描写は到底無理なことで、読者が台湾人知識階級であるならば、尚更のことであった。ここに台湾人作家が過半を占めた理由があった。そしてまた、このことははしなくも総督府による台湾統治の限界をも示しているとも言えよう。

さて、派遣先が決定すると、作家達は直ちに現場に赴いた。そして、情報課は帰還後まもなくの七月一三日に「台湾は斯く戦ふ・従軍作家座談会」を開催し、その様子を七月一五日（南部では一六日）から六回にわたって統合紙『台湾新報』に掲載して、大々的に一般読者に喧伝した。それに続いて台湾文学奉公会は、八月一三日発行の『台湾文芸』第一巻第四号「巻頭」に「作家派遣について」という一文を載せ、且つ「情報課委嘱作品」として高山凡石（陳火泉の改姓名）「御安全に」と楊達の「増産の蔭に」を掲載し、更に呂赫若を除く一二名の「派遣作家の感想」を掲載した。次いで、十一月一〇日発行の『台湾文芸』第一巻第五号には、西川満・河野慶彦・長崎浩・張文環・楊雲萍の作品が掲載され、それまでには『台湾時報』や『旬刊台新』等にも濱田隼雄・龍瑛宗・呂赫若等の作品も発表されており、派遣作家一三名の作品はすべて出そろった。そして、それからほぼ一ヶ月後に『決戦台湾小説集』乾・坤二冊が、台湾出版文化株式会社から出版されたのである。台湾決戦文学会議より一年余、派遣決定より僅か六ヶ月後のことであり、これで先の決戦文学会議の目的はすべて完遂されたことになった。

以下に各作家の作品の及び初出誌を掲げておく。

○『決戦台湾小説集』乾之巻（昭和一九年一二月三〇日 台湾出版文化株式会社）

濱田隼雄「炉番」（昭和一九年七月一五日 『台湾時報』第二九四号）

高山凡石「御安全に」（昭和一九年八月一三日 『台湾文芸』第一巻第四号）

龍瑛宗「若い海」（昭和一九年八月一〇日 『旬刊台新』第一巻第三号）

西川満「石炭・船渠・道場（詩）」

「戦争と勝利の結晶石」（昭和一九年八月二〇日 『台湾新報』）

「この一刻を」（昭和一九年九月一八日 『旬刊台新』第一巻第七号）

「斗六国民道場」（昭和一九年十一月一〇日 『台湾文芸』第一巻第五号）

吉村敏「築城の抄」（『台湾芸術』九月号〈掲載日・巻号不明〉）

張文環「雲の中」（昭和一九年十一月一〇日 『台湾文芸』第一巻第五号）

河野慶彦「鑿井工」（昭和一九年十一月一〇日 『台湾文芸』第一巻第五号）

○『決戦台湾小説集』坤の巻（昭和二〇年一月一六日 台湾出版文化株式会社）

西川満「幾山河」（昭和一九年八月一日 『旬刊台新』第一巻第二号）

周金波「助教」（昭和一九年九月二〇日 『台湾時報』第二九六号）

長崎浩「山林詩集（詩）」（昭和一九年十一月一〇日 『台湾文芸』第一巻第五号）

楊達「増産の蔭に」（昭和一九年八月一三日 『台湾文芸』第一巻第四号）

新垣宏一「船渠」（昭和一九年十一月一〇日 『台湾文芸』第一巻第五号）

楊雲萍「鉄道詩抄（詩）」（昭和一九年十一月一〇日 『台湾文芸』第一巻第五号）

呂赫若「風頭水尾」（昭和一九年八月二五日 『台湾時報』第二九五号）

では、発表された作品は、果たして奉公会及び情報課の企図と合致したのだろうか。

先ず、収録された小説中に描かれた主人公を見ると、以下のようなになる。

濱田隼雄「炉番」アルミニウム精製の高炉係の台湾人、金圳。

吉村敏「築城の抄」日本人作家の森川忠平。

河野慶彦「鑿井工」石油掘削工の日本人計七。

西川満「幾山河」鉄道の日本人保線工，久我源八。
 新垣宏一「船渠」ドック工場の台湾人工員，黄明雲。
 高山凡石「御安全に」銅山の日本人職長山中捨次郎と台湾人支柱夫の張東輝。
 龍瑛宗「若い海」海兵団×分隊所属の台湾人二等水兵森川（改姓名）と王祐坤。
 張文環「雲の中」山林伐採に従事する台湾人鄭水來の妻阿秀。
 周金波「助教」斗六国民道場の台湾人助教，蓮本（改姓名）。
 楊達「増産の蔭に」作家の私，鉦夫の張君と日本人労務係囑託，佐藤金太郎。
 呂赫若「風頭水尾」謝慶農場の台湾人農夫徐華と農場の親方洪天福。

一見して解ることは，日本人作家の主人公は濱田と新垣を除けば日本人であり，台湾人作家は高山凡石と楊達に日本人も登場するものの，すべて台湾人が主人公である。

先ず，濱田と新垣の小説がどのように主人公を描写したか見ることにしよう。

アルミニウム精製の高炉係の金圳は，灼熱地獄の現場で仕事をしていて。毎日の疲労蓄積の中で「激しい，熱い，苦しい工場より，もっと楽なところ」へ転職を考えており，ある日欠勤して「誰が二度とあんな苦しい嫌なところへ行くもんか」と決心しかかる。そこへ間に合わせに使った粗悪ペーストのために高炉がすべて駄目になりかかって，現場では高炉係が大混乱で奮闘しているとの知らせが入る。金圳はそれを聞くや臉が熱くなり，欠勤した責任が胸を突き刺したが「不思議に，俺は日本人だ，と腹の底が叫」び，そこで迷いは消えて現場に駆けつける。そして，現場での修復作業の中で，「この腕の力が炉を生き返らせ，さうして飛行機を作り出すんだと，身をもつて信ずる事が出来」るようになる。

新垣の「船渠」の黄明雲は，工員養成所で三年間学んだ養成工。ドックで船の修理をしているが賃金が安い。同僚の養成工である林炎はそれが不満である。ドックに隣接する愛国造船はドックの二倍の賃金なので林炎は黄明雲と一緒に移ることをもちかけるが，それには応じず，林炎はドックを無断欠勤して愛国造船で働く。それに対して黄は「今がどんな時だか分つてみるだらう。増産命令で，ドックは今一生懸命だぜ」「俺達は金のために働いてるんぢやないんだぜ。国のためだぜ」と説得し，林炎も改心する。

以上のように，どちらの作品も条件のよりよい仕事にありつこうとする台湾人工員が，戦時期の「産業戦士」として目覚め，改心することををテーマとしている。とくに新垣の小説は，増産と戦争の関係をプロパガンダ的に唐突に述べ立てる一節が挿入されており，時局的教訓色が濃厚で，小説としては，瀧田貞治の言葉を借りるならば「全くお門違い」な描写になっている。このような教訓的な内容は両者ともに，台湾人に向けられたものであるが，描写は極めて表面的で，もし上記に登場する人物を日本人に置き換えても通用する作品である。濱田と新垣はともに学校の教師で，日本の知識人としては台湾人に日常的に接していた故に，台湾人を主人公としたとも考えられる。また，教師という職分からこのような教訓的な内容になったのかも知れないが，日本人作家には，台湾人の生活感覚や感情に深く立ち入った描写ができなかったことを，この二つの小説は証明していると言えよう。

この点については次のような指摘もできる。本小説集の中では，二人の作家が同一派遣地に行きそれぞれ作品を発表している場合がある。たとえば，長崎浩と張文環の場合を見てみよう。両者は共に太平山という森林伐採区に派遣され，長崎はそれを数首の詩として発表し，張文環は伐採夫夫婦の生活を小説にまとめ上げた。長崎の詩の一首「樹を伐る人」は次のような詩である。

斧の音が戛然と鳴り
 山の芯を貫く響
 山霊の猛るやうな山鳴のあと
 もとの寂寞が
 大きなもんどりをうつてかへつてきた
 あなたは静かに鹿の腰皮を敷き
 ゆつたりと煙草を吸ひつけた

千年の絆を
 この一瞬に絶つた感慨は
 あなたの瞳にも戻つてみた

この樹もやがては
 艦となつて出征するでせう
 さう言つて
 あなたが樹膚を撫でるとき
 大きな節くれだつた掌から
 深い愛のいたはりが
 樹芯にしみるやうだつた（以下略）

小説集の中に詩が入っているのは、些か奇異な感じもするが、この詩は、当時の台湾の日本人作家が日本語で作ったものとしては、言葉の面から言えば完成度は高いと思う。山深い樹林の中で、大樹を伐採し終えたばかりの樵夫がひとときを憩う姿は一幅の画のようである。しかし、これを張文環の「雲の中」の以下の一節に重ね合わせると、その文学における訴求力の相違がまざまざと解る。

～殊に千年もする材木が倒れて行く姿は悲壯であつた。千年のあひだ風雨にさらされ、嵐に堪へてきた古木の姿を一瞬にして、人間もしくは国家のために犠牲にすることは尊いやうな感じがして、見るものをして神々しいものに打たれずにはゐられなかつた。木が倒れる時に云ふ樵夫のヒダリナカヤマと云ふ声もお経のやうで、阿秀などは夫に聴いたゞけでも手を合したい氣持であつた。

詩と小説の相違はあるが、この同一素材に対する両者の作品を比較すると、長崎の描写がただ外面からの眺望や感覚を、情報課の要求するところから従ってきれいにまとめたにすぎない。したがって、作者と樵夫の距離は内面的にもかなり遠く、それは台湾の樵夫の日常感覚を理解し得なかつたことに起因すると思われる。勿論、たった一週間の経験では台湾人樵夫の日常感覚にまで踏み込んで理解することは困難ではあろうが。それに対して、張文環の簡潔な描写は、千年樹の伐採に対する悲壯さと敬虔が、樵夫その人ではなく、その妻の「手を合したい氣持」という言葉に象徴的効果的に集約されており、読者の内面に素直に訴えると共に、樹木伐採を生業とする樵夫の樹木伐採に対する悲しみという矛盾した内面が、多重的に伝わるのである。また、上記文中

の「人間もしくは国家のために犠牲にすることは尊いやうな感じがして」という箇所は、一見すれば長崎の「この樹もやがては／艦となつて出征するでせう」という樵夫の言葉に対応する「産業戦士」の気持の表現のように錯覚するが、よく読むならばこれもこの樵夫（とその妻）感情の日常的表現であって、張文環の用意周到さを伺わせるに足るのである。

以上のように、日本人作家は「産業戦士」及び「総力戦士たる国民」としての台湾人に読ませるために「産業戦士」としての台湾人を描こうとしたが、それは成功しなかったといえる。そして、それは、当時の日本人は台湾人に対して日本人の心象を理解させることには熱心であったが、台湾人の心象を理解することには甚だ欠けていたことが遠因となっており、長崎宏等の作家や知識人のみではなく、在台的日本人ほとんどにもあてはまることであった。

吉村敏の「築城の抄」は、作者の分身である主人公忠平が、台湾要塞化の工事現場等をルポルターージュ風に描いた作品であり、それは、炭鉱を描いた楊逵の「増産の蔭に」と同じ手法である。吉村も楊逵も共に実際の現場を見て、派遣以前の自らの想像を絶する過激な労働に驚愕し、その落差に恥じ入る。そして、共に現場での自らのみじめな姿を描いて、その厳しい労働を紹介する。しかし、更にその落差の依って来るところを眼光鋭く認識することこそ、作家としての力量の間われるところなのである。今、この点について両者の作品を比較してみる。

忠平は～真剣に働らく姿の底に、きらりとかゞやくたつといものに触れてきた嬉しさを、しみじみと感じ、築城周辺に立つて、台湾要塞化の真にあるべき姿を直視し、いまは、崩れ落ちてしまつた想像のうへに、圓匙や鍬や糞箕が築きあげてくれた新たな建設をみた。それは、かつて、忠平が穂先に浮んだ敵の幻影に竹槍をつけた構へのやうに、泥と汗によごれ、歯をくひしばつて、しつかと敵に対した見敵必殺の構へであつた。それこそ、勝利への道を歩一歩、力強くあゆんでゆく日本人の凜とした姿である。

こんな人達（鉱夫を指す＝筆者）を見下げることに依つて、自分のくだらなさを無遠慮にさらけ出して来た吾々所謂知識階級は、今こそ輝を締めなほさねばならぬ。～／～この時に私の気持は、安易な生立ちをした所謂インテリゲンチヤなら誰でも理解して貰へると思ふ。たゞこゝで一言告白しなければならぬことは、強がりや偉がりや、口だけの大言壮語などと一切縁をきり、そして一般の勤労者並みに、私も鉄敷の上で鍛へられなほさねばならぬと言ふ欲求だけである。

前者の吉村は、「産業戦士」と己の間に崩れ落ちるような落差を感じたが、彼らが「真剣に働く姿」に「嬉しさを、しみじみと感じ」、その姿が「勝利への道を歩一歩、力強くあゆんでゆく日本人の凜とした姿である」と描写する。吉村のこの作品には現場の日本人はしばしば描写の対象となって登場するが、主題の中心となるべき「産業戦士」がどのような人物なのかという描写はまったく欠けており、上記の引用においてもただ己の感じたことが列挙されるのみで、「真剣に働く姿」の人間の内面が具体的に見えてこない。ただ派遣現場を走馬看花的になぞっただけの作品で、主題はあるが、その主題を支える人間不在では、文学作品とは言い難い。日本人作家は、結局台湾人を描き切れなかったと言えよう。

これに比較すれば、楊逵の人間観察は確かである。全編ユーモアに溢れた筆致且つ余裕をもつた人間観察で、最下層の労働者としての「産業戦士」の過酷な労働条件やその生活を描き、そし

て、己との対比から、上記引用のような己を含めた知識人批判に至っている。そして、その批判は単に知識人の批判に終わっているだけではない。この小説の主人公である張を「所謂無学文盲の男」という設定にしているが、それは先にあげた人口統計中の日本語理解者からはみ出した台湾人なのである。そして、情報課のいう「産業戦士」あるいは吉村が見た「産業戦士」の大部分は、このような人々であったのだ。この楊達の人物設定に、先に引用した「黙々と地底で働き通してゐるここの人達にとつて、芝居と言ふものが如何に大事な」ものという言葉を重ね合わせれば、「産業戦士」の大部分を占める「所謂無学文盲目」の台湾人労働者には、慰労として芝居（それもおそらくは台湾語の）こそが「鼓舞激励の糧」として必要なものであって、己の作品をも含む「情報課委嘱作品」、つまり『決戦台湾小説集』に取められるたような小説等は不必要だとの奉公会及び情報課への批判も見えてこよう。しかし、社会主義の洗礼を受けた楊達がこの小説で最も訴えかったことは、「聖戦完遂」のために「産業戦士」との美称の下で石炭増産に取り組む台湾人坑夫達が、「増産の蔭に」あって、いかに過激な仕事をし悲惨劣悪な生活をしているかということである。それはこの非常時における楊達の出来る限りの日本の台湾統治への批判であったと言えよう。

そして、このような批判は、他の台湾人作家の作品にも読みとることができる。

呂赫若の作品「風頭水尾」は、農業増産に挑む農民を描き、また、張文環の「雲の中」は、木材増産に関わる伐採人夫が描かれており、共に国家の「聖戦完遂」要請に基づき増産に邁進する「産業戦士」が描かれているようにみえる。しかし、呂赫若は彼の作品には似合わぬ円満な筋立てで、「風頭水尾」という最悪な環境を智慧と勤勉で克服していく台湾人農夫たちを描き、そして、張文環はヒューマニズム溢れる目をもって、巨大な樹木が切り倒されることに祈りを捧げる台湾人妻の「雲の中」での幸せを願う生活を描いている。それは、戦争下にあるものの、「聖戦完遂」とは別次元の台湾人の生活を描くことで「聖戦完遂」を無視し、作家としての自らに課せられたテーマや奉公会と情報課の企図に対して、己の気持ちを頼みつつ、ダグラス・L・フィックスも分析したように^(註・〇)、あるものは己の文学的個性を生かし、あるものはその個性を殺してまでも巧みに反抗のメッセージを託した、と読みとることも可能であろう。そして、それを読みとることが可能だったのは、やはり極めて限定された台湾人「島民」と「産業戦士」であった。

さて、ここで視点を変えて、一般読者のこれらの小説に対する反響を見ることにしよう。昭和一九年九月二九日の『台湾新報』「台北州版」に徐淵琛という読者が「増産戦士の歌」という一文を寄稿し、作家派遣及びその作品について以下のような感想を述べている。

～発表された作品の中には報導的な作品がないでもなかつた。しかし、今回の企ての収穫の大きなひとつは作家の視野を広めたことであらう。更に望みたかつたのは単に工場或は鉱山に於ける作業を主とした素材の取上げの外に、労務者が一工場人であり、一社会人に於て最と深く、広く描かれて欲しかつたことである。工場内や鉱山などに於ける労務者達の生活、家庭生活、部落又は一般社会生活の問題などがそれである。増産の一路にあるこれらの職場は家庭と連り部落と繋つてゐる。これらの世界には激しい敢闘精神を見ると共に同僚間の愛情或は部落を愛する心、父性愛、母性愛、男女間の愛情、任務完遂の責任感等の個人の愛情、集団の愛情、人間の意思、感情などが織りなす人間社会の諸形相があらう。これを如何に取上げて敢闘する増産戦士の姿を描写するかは作家の手腕と力量に待つ外はない。～／作家の現地派遣には現地側にひとつの刺激を与へた。～現地側の文学に対する理解と共に労務者自身が文学する心を培

はれるならば更に望ましい。農場からも、工場からも、鉱山からでも立派な詩や小説、歌が産まれて、真の増産の歌は増産戦士から産まれるべきであろう。農民文学も工場も共にその現地から産まれて然るべきであらう。～増産の歌は矢張り増産戦士が自らがうたふべきである。

以上のように、読者の派遣作家の作品を見る目はかなり厳しい。一応「今回の企ての 収穫の大きなひとつは作家の視野を広めたこと」とは述べてはいるが、それは単に「作家の視野を広めた」にすぎず、結局作家達は、社会的生活者としての労務者（産業戦士）を、また、様々な愛情や意思や感情が交錯する人間関係の中での労務者を描いてはいない、つまり社会的人間としての労務者を描く手腕と力量を作家達は持ってはいなかったと言うのである。この読者が派遣作家の作品を読んだのは、九月末までに各誌に発表されているものであるから、濱田・吉村・西川・高山・楊逵・龍・呂の小説で、それならばこの読者にとっては、当時著名な台湾人作家でさえ増産戦士を描くことができなかつたということになる。故に彼は、増産戦士を描くことのできるのは、増産戦士でしかないと結論づけている。これが、派遣作家の小説に対する当時の読者一般の感じ方か否かは解らないが、このように感じていた読者がいたことは、作家の筆力に問題があったというよりも、むしろこの企画自体に無理があったことを示していると言えるのではないだろうか。

『決戦台湾小説集』が上梓されようとする直前に、文学奉公会は別に「『産業戦士読物』の刊行」を企画した。その「作品執筆の要領」の中に「内容並びに用語平易なること。(国民学校初等科修了者程度の国語力を有するものに解るもの。）」、「娯楽的要素を多分に有すること」という条項が見える。この時に至って文学奉公会も『決戦台湾小説集』の読者が誰なのかをやっと理解したのであろう。しかし、その企画は更なる戦況悪化の中で実現はしなかつた^(註10)。

五、『決戦台湾小説集』における西川満と張文環

最後に『文芸台湾』、『台湾文学』を率いてきた西川満と張文環のこの小説集との関わりについて簡単にふれておこう。

台湾決戦文学会議の後、台湾文学奉公会によって『台湾文芸』が創刊され、それまで台湾文芸界を二分してきた『文芸台湾』及び『台湾文学』の対峙するという構造は消失した。そして、台湾文芸界は文学奉公会の下で日本人作家が主導的な役割を果たすようになっていく。その中心にいたのが西川満である。本稿の最初にも矢野峰人や長崎浩との関係等に触れたが、更に以下のことから、本小説集の刊行に西川は主導的役割を果たしたと推測されるのである。

当時の台湾の作家の中では、巧みな文章、その小説の構成やストーリー展開のおもしろさでは、西川の右に出るものはいなかつたのではないかと思う(但し短篇小説に限るのだが)。本小説集に収められた保線工を扱った「幾山河」も彼の他の作品に比べれば精彩は欠くが、西川らしく枚数制限を遵守して戦時下臭もあまりなく、大衆小説的にうまくまとめ上げている^(註11)。しかし、この小説はこの小説集に収められた他の作家の小説とは基本的に異なるところがある。それは、小説の内容ではなく、小説を描くべく派遣された派遣地についてである。各作家の派遣地がどのように決まったのか解らない。『台湾文芸』第一巻第四号掲載の「派遣作家の感想」や小説集の内容から察するならば、張文環を除くほとんどの作家には初めての土地かあるいは初めての派遣現場であったようだ。ところが、西川満の場合は、些か異なる。彼は「幾山河」を発表する以前にす

で、鉄道に関して「台湾の汽車」(『台湾時報』)、「二人の独逸人技師」(『台湾鉄道』)、「龍脈記」(『文芸台湾』)、『桃園の客』(日孝山房)等の作品を発表しており、更に昭和一八年七月から長篇小説「台湾縦貫鉄道」を『文芸台湾』(終刊後は創刊号から昭和一九年一二月八日『台湾文芸』第一卷第七号まで連載)に連載中だったのである。西川満からの直話によれば「台湾縦貫鉄道」を書くに当たってかなりの鉄道関係の資料を収集し、また、名士であった父親の西川純を介して、鉄道関係者から話を聞いたという。故に、本小説集に収めるために短篇小説を書くことは他の作家に比べて比較的簡単なことであった。おそらく、情報課が鉄道小説を依頼したというよりは、西川の希望を情報課の方が受理したのであり、また、長崎浩が仲介したのかもしれない。「派遣作家の感想」に掲載されている西川満の「鉄道日記」を読めば、「単なる表面的見聞に終わることなく、真に現場で挺身する人々の息吹に触れ、その労苦を味ふため一週間内外現地に滞在し起居飲食を共にして」(『台湾文芸』第一卷第四号「派遣作家について」)というよりは、官僚の視察という感じが否めず、他の作家に比べてもかなり優遇されていることが解る。

次に、本小説集において西川満のみが乾・坤の双方に執筆していることである。なぜ、西川満のみがどちらにも執筆できたのだろうか。確かに彼は鉄道・炭鉱・台湾船渠・斗六国民道場と他の作家よりも多くの現場に派遣されているので、作品も多くなったとも解される。しかし、楊雲萍も四五カ所の地を回ってはいるが、作品は「鉄道詩抄」のみであった。本小説集の出版元は台湾出版文化株式会社である。この会社は実は、西川満が自ら言うように、西川が当時連載発表していた長篇小説「台湾縦貫鉄道」を単行本として刊行するために、父の西川純が設立した会社であって、西川の小説『日本の柱』や西川編の小説集『生死の海』等も出版していた。本小説集の奥附には「発行人は田中一二」とあるが、昭和一八年一二月に父を亡くした西川は、前述のように父の経営する樹林の昭和炭鉱を引き継いだ^{みやく}が、また、この出版社の事実上のオーナーでもあったのだ。

更に加えるならば、上述のように西川の父が昭和炭鉱のオーナーであり、西川自身の生活がそれに支えられてきたために、鉱山と文学の関連には大いに興味をもっていたことがあげられる。昭和一八年一〇月一七日、昭和炭鉱において「徴兵制をめぐって」と題した座談会が長崎浩、周金波、陳火泉、神川清が参加して開かれた。それと同時にその座談会の隣室で西川満、濱田隼雄、新垣宏一、高橋比呂美、徳澄^{みやこ}、林秋興、村田義清等が参加した「鉱山文学」座談会も開かれていた。彼らは、西川満の「石炭の増産が叫ばれてゐる折ではあり、一応石炭山の実状を、同人の諸君に見ていただくのもよからう」という計らいで「毎年恒例の社外集会」を昭和炭鉱の坑内見学とし、その後二班に分かれて、上記の座談会に臨んだのである。「鉱山文学」座談会については、どのような内容が交わされたのかは記録がないのでわからないが、西川満の「炭山行」(昭和一八年一二月一日発行『文芸台湾』第七卷第一号)によれば、『文芸台湾』第六卷第六号に発表された日野原康史「夢像の部屋」、土井はる「落磐」、相沢誠「鉄樹」が話題の中心であったようだ。この三作はいずれも炭鉱を扱った「鉱山小説」であるからだ。勿論、これらの作品は「増産」を主要テーマにしたわけではなく、坑内に働く坑夫・坑婦の感情や生活や人間関係を断片的にそれぞれ三様に描いたものであるが、これらの作品を「鉱山小説」と銘打って座談会を開くという発想に、『決戦台湾小説集』に連携してゆく西川満の意識が看取できるだろう。

以上の事に先に「一、『台湾文芸』の創刊」の項で述べたことを重ね合わせると、当時の西川満の文芸界での立場が理解できるであろう。石炭会社という戦時においてはことに重要産業であった会社のオーナーであり生産現場をテーマにした文芸座談会を開いていたこと、『台湾文芸』の中

心的な文芸家として、また、かつての『台湾日日新報』の文芸部長として、小説は勿論、編集者としても定評があったこと、情報課から文学奉公会に出向の長崎浩とは盟友で、奉公会の矢野峰人は最も親しい間柄。そして、本小説集の出版元の実質的経営者となれば、『決戦台湾文学集』刊記に「台湾総督府情報課編」とあろうとも^(註三)、この日本統治期最後のアンソロジーの編集——それは勿論、作家の選択や各作品の初出時点より——に実質的な影響力をもったのは西川満であったと推測するに十分ではないだろうか。

さて、一方張文環は『台湾文学』停刊以後、台北から台中の霧峯に転居しており、本小説集の編集等には直接には関わらなかった。彼と本小説集の関わりは「雲の中」という作品が収録されたということ、そして当時の台湾人の代表的作家が執筆したということにとどまる。「雲の中」は、張文環らしい素直な描写の作品である。主人公は阿秀という樵夫の妻で、山——「雲の中」——で働く再婚の夫の所へ前夫の子供を連れてやってくる。阿秀は下界と異なった「雲の中」での小さな生活に次第に満足を覚える。しかし、夫の鄭水来はたまに下界に女遊びに行くことを唯一の楽しみしている。「増産現場」に来てやすらぎを覚える妻と、そこから離れることを楽しみにする夫、そのコントラストが面白い。そして、下界から遠く離れたように思われた「雲の中」も、また「増産現場」であり、「雲の中のこの世界が、遠い太平洋で戦つてる軍艦とは密接な関係が」あったのだ。そこで張文環は、次のように描写する。

阿秀は人間の力で山の材木が伐られて行くと同時に集材機がぐんぐんと移転して行く風景を見て、偉大な力があると同時に蟻のやうに細い動きがあるのを感じないわけには行かなかつた。そのこまかい小さな動きが大きな力になつてゐるのだ。水来のやうな蟻一匹、また自分も蟻のやうになつてゐるのだ。そのために、その蟻のやうな小さな心配は何の役にも立たない。心配しなくてもいい。この国家の大きな動きに投じて、動くがまゝにまかせればいい。阿秀はもう嫉妬はしまいと思つた。夫がゐなくても、炊事婦になつても、この子だけは立派な女に育てあげたい。

遠い下界で国家が起こしている大きな力——戦争、それは「雲の中」の「増産現場」にも見えない糸で直接繋がっている。その見えない糸が、夫を「増産現場」に引き寄せ、また阿秀をも引き寄せた。戦争という大きな流れは、蟻のような存在の夫にも阿秀にも直結しているのだが、どうなるものでもなく、それを運命として受け入れざるを得ない。そして、阿秀と同様に蟻のような存在ではあるが、一番身近な存在であるはずの夫の心も離れている。時の流れや人の心の変化には抗う術もないという阿秀のあきらめにも似た感情。が、しかし、その小さな存在の小さな生活こそが、大きなものをも動かすのだという阿秀の自信と決意。現実を見据えて生きていこうとする台湾女性の力強さを描く張文環のリアリストとしての目は確かで、その飾らず素直な小細工のない筆致がこの小説を好短篇に仕上げている。張文環の研究者である野間信幸はこの作品を分析し、張文環の抵抗や「聖戦完遂」の無視を読み取ろうとしているが^(註四)、この小説は、それを強調して読めば読むほどに張文環の真意から離れてしまうのではないだろうか。阿秀にとっては、戦争も夫の遊びも離婚した過去も彼女に深刻な影響は与えてはいるものの、それらはまた、現実を見据えて生きるという台湾人女性の力強さをも導き出している。時局に迎合も抵抗もしない自然体のこの小説は張文環の個性そのもので、瀧田貞治や呂赫若がいう「文学の独自性」を保っている。それは作家の自負と良心の描出であって、もし、張文環の抵抗や「聖戦完遂」への無視を

論じようとするならば、この作品における張文環の自負と良心にこそ見るべきではないだろうか。

結 論

戦争末期の台湾文学界は、以上見たように文芸家に対する戦争協力をいかに遂行するかということが、統治者側の大きな課題であった。そのために、皇民奉公会中央本部のもとに台湾文学奉公会を設置し、そこに台湾の文芸家を一元化しなければならなかった。そのためには、まず当時の台湾文学界の二大勢力であった『文芸台湾』と『台湾文学』、そして、そこに依る作家たちを統一的に台湾文学奉公会の傘下に吸収する必要がある、殊に台湾人作家が中心の『台湾文学』派をいかに取り込むかが緊急の課題であった。そのために台湾決戦文学会議が開催され、形の上では「本島文学決戦態勢が確立」し、「文学者の戦争協力」も承認され、台湾文学界の二大勢力も新設された『台湾文芸』——台湾文学奉公会の下に統合された。戦況がますます悪化する中で、内地の日本文学報国会主催の総蹶起大会にならって、台湾文学奉公会も「台湾文学界の総蹶起」を開催したが、いかように作家達を戦争に協力させるか「その理念と実践方法」は具現化されなかった。そのような折りに、総督府情報課からその「実践方法」が具体的に提示されたのである。そして、作家達は指定された派遣地に赴きそれぞれに作品を発表した。そこには、作家の創作における自由や呂赫若等のいう「文学の独自性」は最早なかった。それは一見台湾文学の死にも等しいものであった。しかし、そのような抑圧された状況の中でも一部の作家達は、自らの思いをそれぞれの作品に託したのである。『決戦台湾小説集』は、台湾の作家達を統合し、戦争協力という大義名分の下に出版された日本の台湾統治期未曾有の小説集であったが、それは日本統治期台湾文学の掉尾を、そして日本の台湾統治の末路を象徴した出版物でもあった。

【注】

- (一) 昭和一九年五月一日台湾文学奉公会『台湾文芸』第一巻第一号一〇八頁。尚、「台湾決戦文学会議」とは、昭和一八年（一九四三）年十一月一日、台北市公会堂（現中山堂）において台湾文学奉公会主催、総督府情報課、皇民奉公会中央本部、日本文学報国会後援により行われた台湾文壇の一元化を意図した会議。拙稿「西川満と台湾決戦文学会議」（中国文芸研究会編『太田進先生退休記念中国文学論集』）参照。
- (二) 大会は情報局、陸軍省、海軍省、大政翼賛会に後援で行われる予定であったが、当時戦局は逼迫しており、開催前夜に敵機来襲の「警戒警報」が発令されて、それは会議当日まで解除されなかったため、開催は延期となった。この第二回大会から、朝鮮及び台湾の文学者の参加が認められたが、開催延期となったために日本文学報国会は、六月九日に急遽同会第一会議室で上京中の朝・台文学者四人による「朝鮮・台湾の文学活動」と題する懇談会を開いた（昭和一九年七月一日『文学報国』二九号）。台湾からは、公務出張で上京中の台北帝大瀧田貞治が参加する予定であったが、延期となったために懇談会に参加して、台湾に於ける文学活動を説明した（瀧田はその後大陸に渡り京城・新京・北京・南京・上海を視察し九月二八日帰宅している）。尚、延期とはいうものの結局この会議は時局逼迫により開催されなかった。この「総蹶起大会」の議題は七項目あり、その中に第二項「生産の飛躍的増強に関する提案」、第六項「文学者の職場挺身に関する提案」及び第七項「決戦非常措置下に於ける文学の活動に関する提案」という議題があって、これらの提案が「台湾文学界の総蹶起」を通して、台湾作家の増産現場派遣、そして『決戦台湾小説集』刊行に影響を与えた可能性もある。（文報の総蹶起に関しては、昭和一九年五月一〇日・二〇日・六月一日・二〇日『文学報国』第二五号～第二八号及び一九九五年六月一日青木書店、櫻井富雄『日本文学報国会——大東亜戦争下の文学者たち』を参照。）

- (三) (矢野) 峰人「台湾文学界の総蹶起」(昭和一九年六月一四日、台湾文学奉公会『台湾文芸』第一卷第二号)
- (四) 注二の櫻井富雄著による。
- (五) 瀧田貞治(一九〇一～四六)和歌山県出身。昭和二年東京帝国大学文学部国文科卒業後大学院に進学したが、翌年六高(岡山)の講師となり、昭和四年に台北帝大文政学部助教授となる。号は鹵山(ROZAN)。台北にて「西鶴学会」を組織し、機関誌『西鶴研究』(昭和一七年～一八年台北・三省堂)を四期発行。著書に『西鶴裸俎』(昭和一二年七月巖松堂)、『西鶴裸藁』(同一六年四月台北・野田書房)、『西鶴の書誌学的研究』(同一六年七月同前)があり、他にも時局や当時の文学に関する評論等がある。引き上げ直前の台北で世界した(以上、久松康二氏からのご教示による)。
- (六) 昭和一九年三月二七日、西川満編『生死の海』、西川満「生死の海」、徳澄島、「潮鳴り」、大河原光広「加代の結婚」、小林洋「新しい建設」、河野慶彦「年闊けて」/昭和一九年一月一日、濱田隼雄編『萩』、濱田隼雄「萩」、今田喜翁「南への船出」、喜納政明「海口の女」、亀山春樹「南蛮賀留多」、竹内治「夢の兵舎」、小林井津志「竹筏渡し」。
- (七) 藤井省三「〈大東亜戦争〉期の台湾における読書市場の成熟と文壇の成立」(一九九五年一〇月三〇日、東方書店『よみがえる台湾文学』収)
- (八) 鍾清漢『日本植民地における台湾教育史』(一九九三年二月二七日多賀出版)
- (九) 下村作次郎は、「台湾における作家派遣」を「一九四一年一二月八日前夜に実施された、日本人の南方徴用との関係」でとらえ、この派遣は「台湾人作家の『戦争協力』への動員こそが眼目であった。そして、その先に用意されていたものは台湾人への徴兵制の実施であり、いずれ台湾人作家の南方徴用もその視野に入っていた」と解釈している。一九四四年九月一日には台湾人の徴兵制実施が決まっており、この作家派遣が南方徴用をもその視野に入れての派遣という氏の意見は説得力があり、参考になる。ただし、今回の派遣自体は、台湾島内のことであり、また日本の南方徴用作家が担った「対占領地宣伝」「対軍隊宣伝」「対敵宣伝」という任務は帯びていなかった。また、『決戦台湾小説集』が一万部という台湾の出版界としては破格の部数について、河原功・藤井省三は情報課あるいは文学奉公会が買い上げて、各職域に贈るためにこのような部数になったのではないかと推測している(いずれも平成一三年六月二日日本台湾学会第三回学術大会「シンポジウム『決戦台湾小説集』をめぐって」中の発言)。
- (一〇) ダグラス・L・フィックス/金築由紀訳「徴用作家たちの『戦争協力物語』——決戦期の台湾文学」(一九九五年一〇月三〇日 東方書店『よみがえる台湾文学』)
- (一一) 昭和一九年一月一日発行の『台湾文芸』第一卷第五号の「文奉会報」に「『産業戦士読物』の刊行」として、次のようにある。
- 「日夜生産増強に挺身してゐる産業戦士諸君に恰好な読物がないことは従来各方面から懇へられてきたことであつた。そして近来、文学奉公会に対してこの渴望を満すべく要望されてきた。生産増の第一線に敢闘する強る産業戦士諸君に贈つて、その労を慰し、明日の活力を与へ、その闘志を昂揚して戦力場強に資する為、文学奉公会では今般小説部会員及びその他の方面に委嘱して、『産業戦士読物』を刊行することになつた。その要領は左の通りである。
- 一、文学奉公会編集部にて執筆を依頼する。
 - 二、文学奉公会編集部にて原稿を取りまとめ、検討の上編輯をなす。
 - 三、出版は台北市内の出版書肆に委嘱し、その選択は作者と協議の上決定する。
 - 四、作品執筆の要領
 - イ、内容並びに用語平易なること。(国民学校初等科修了者程度の国語力を有するものに解るもの。)
 - ロ、健全なよみものであること。
 - ハ、娯楽的要素を多分に有すること。
 - 五、種目を左の二種とする。
 - 甲、成人向
 - 乙、青少年向
 - 六、なるべく袖珍版とし、価格の低廉なるものとする。
 - 七、一篇の長さは、四百字詰六十枚と百二十枚の二種とする。

八、採否は編集部に一任すること。」

また、昭和一九年一二月一日発行の『台湾文芸』第一巻第六号の「文奉だより」にも、下記のような記述があって「産業戦士読物刊行」の計画は進行していたようである。

「産業戦士読物刊行の企画は会員諸氏の熱意ある賛同により、目下着々と稿を進められてゐる。既に坂口栲子氏が力作を寄せられた外、楊達氏、呂赫若氏、龍瑛宗氏、佐藤孝夫氏、中山ちゑ氏等の各氏も近く脱稿の予定である。編集部では出来るだけ迅速に刊行し、一日も早く産業戦士諸君の手許に送りたいと念じてゐる。」

- (一二) 生前の西川満氏にお聞きしたところによると、派遣作家が「情報課委嘱作品」として作品を発表するにあたり、一作品原稿三〇枚前後という制限があったが、寄稿された作品はその制限を大幅に上回るものが多く、本来は一冊で出すべきものが乾・坤の二冊になった、とのこと。『台湾文芸』第一巻第四号の「後記」で矢野峰人「情報課の注文に三十枚とあつたので困つた向もあつたらしいが、文筆の士は与へられた枚数にちやうど取まるやうに原稿を纏める事をを心がくべきである。これは自分にとっては一つの修行であり、依頼者に対する礼儀でもある」と書いていることは、それを裏付ける。
- (一三) 昭和一九年七月一四日の『台湾新報』「台北州版」に「作家の体験に聴く——第一線に闘ふ島民の姿」という記事があり、その末尾に本小説集の編集委員会の委員が掲載されている。それに依れば、委員長は文学奉公会常務理事の矢野峰人、委員は元台湾日日新報社で皇民奉公会戦時生活部長・大澤貞吉、陸軍報道部・竹内中佐、海軍武官府・木村大尉、保安課事務官・山本□太郎の外、台湾新報社から一人、情報課から二人の委員が出ていることが解る（□は一字不明）。
- (一四) 野間信幸「『台湾文芸』における張文環」（一九九二年二月一日、中国文芸研究会『野草』四九）

附記：本稿は、平成一三年六月二日に東京大学本郷キャンパス山上会館で開催された「日本台湾学会第三回学術大会・文学文化分科会A シンポジウム『決戦台湾小説集』」における基調報告を増補したものである。尚、本稿は、平成一二年度聖徳学園大学研究助成金による研究成果の一部である。